



2018年11月

岐阜県立瑞浪高校

首都圏同窓会報



第34号

首都圏同窓会会報に 寄せて



岐阜県立瑞浪高等学校
校長 増田文代

今年の夏は猛暑、台風、地震などの自然災害が多く、同窓会の皆様におかれましても記憶に残る夏だったのではないのでしょうか。瑞浪高校では、九月六・七日に真澄祭が行われ、瑞浪生のパワーが発揮され大いに盛り上がりました。校庭の木々も少しずつ秋色に変わってきています。学校では後期が始まり、生徒たちは進路に向けて、新たな気持ちで取り組んでいます。

六月には首都圏同窓会にお招きくださいましてどうもありがとうございます。大変楽しくつろいだひと時でした。瑞浪高校には、大変すばらしい卒業生の皆様が首都圏にも多数おいでになり、しかも母校を愛し、そして母校のことを考え心配し、ご支援してくださっていることを改めて感じ、伝統を受け継ぎ、次につなげていくことの大切さを痛感しました。

さて、ご存じであると思いますが、瑞浪高校は、少子化や人口流出による生徒数の減少の中で、二年前から「魅力ある瑞高づくり推進会議」を設置し、学校活性化を進めてま

いりました。同窓会からも多大なるご支援をいただき、ホームページの刷新、学校紹介のDVDの作成等を行い瑞浪高校の魅力を中学生や地域に発信することができました。

今年度におきましても、広報活動への援助や調理室、書道室、音楽室などのエアコン設置のご支援を快諾してくださいました。エアコンにつきましても、県教育委員会にも設置要求をした結果、今年度は調理室へのエアコン設置が認められました。県に対しては今後も引き続き、その他の特別教室へのエアコン設置を要求していきたいと思いますが、認められない場合は、改めてご協力をお願いしたいと思います。

瑞浪高校の魅力づくりの一つとして、現在取り組んでいることは、駅から瑞浪高校へのバスの運行です。現在の瑞浪高校は、真澄が丘という小高い丘の上に立地しており、益見口からは急な長い坂を上らねばなりません。これが結構辛く、駅から瑞浪高校までの心理的距離を実際以上に長くしています。八月の中学生向けの一日体験入学では、坂を登る途中に熱中症になって帰る生徒が数人います。こういった状況の中で、昨年度は駅から益見口（中京高校前）までのコミュニティバスを何とか瑞浪高校まで延長できないかを考え、瑞浪市や関係者にお願いをしてみました。バスの台数や法の規制があつて実現できませんでした。今年度の同窓会役員会でこの事をお伝えしたところ、同窓会の役員様が迅速に対応してくださり、実現に向けて次の動きが始まりました。まだクリアしなければならぬ壁がいくつも立ちはだかっています。瑞浪高校の同窓会の皆さんのネットワークの大きさに驚くとともに、とても感謝しています。来年の首都圏同窓会でよいお知らせができればと思っています。

また、今年度からは、学校運営協議会（コミュニティスクール）も設置されました。今年度で終了する「魅力ある瑞高づくり推進会議」を引き継いで、地域の方々に積極的に瑞浪高校の学校運営にかかわっていただき、瑞浪高校の一層の魅力づくりを行うことを目的としています。今年度は六月と七月の二回、会議が行われ、多くのご提言をいただいております。学校で検討しながら進んでいきたいと考えています。瑞浪高校は、生活福祉科や部活動を中心に地域と連携して活動する中で生徒の成長を図っています。今後も地域の方々のご協力・ご支援を仰ぎながら地域に信頼される高校でありたいと願っています。

学習面においても、今年度の一年生からカリキュラムが大きく変わりました。生徒の多様な進路目標に対応するために、二年生から、普通科においても就職希望者が選択できる科目が設定されました。また、生活福祉科でも、進学を希望する生徒用の選択科目ができ、進学から就職まで幅広く対応できるようになりました。このように多様な生徒のニーズをより実現できるように、平成三十二年から単位制高校に移行する希望を県教育委員会に伝えていきます。今後も生徒の進路実現に寄り添えるように柔軟なカリキュラムを検討していきます。また、進学指導においても瑞高塾の刷新を図り、夢の実現のお手伝いができたらよいと考えています。

皆さまのご支援のお陰で心配された統廃合もしばらくは行われぬというところで、ほっとしていますが、今後についてはまだ困難な課題が山積しております。引き続き、首都圏同窓会の皆様のご指導・ご鞭撻をお願いして、ご挨拶とさせていただきます。

「二つの海外生活」



瑞浪高校首都圏同窓会員
表 孝雄 (昭和46年卒)

政府開発援助（ODA）に40年従事、通算15年の海外生活（コスタ・リカ3年、ペルー7年、パナマ5年）を送りました。今は日本の素晴らしさ、特に治安の良さを享受しています。政情不安な開発途上国では戒厳令が敷かれることがあり、治安維持のため軍に権限が委譲され、現場兵士の判断で発砲も可能となります。夜間の空港送迎で検問所を通過する際、通行許可書を所持しているとはいえ自動小銃を向けられると心臓が止まる思いでした。

一方で異文化適応というポジティブな経験も出来ました。特に最初の滞在では不慣れなため多くの戸惑いと沢山の学びの機会がありました。ある会議で出席者が互いの主張を繰り広げ、とうとう時間切れ。自由闊達とも言えますが、議論をどう収斂させるかや事業全体のタイム・スケジュールに考えが及んでない様子には驚き呆れました。また、小学校の授業見学でのこと、ある生徒が堂々と手を挙げ、間違った回答を疑いを抱くことなく述べ続け、先生は傾聴。

文化の異なる複数の民族で構成される国では様々な価値基準、行動規範が存在し、そこでは自らの考えをしっかりと提示できることが

肝要なようです。相手への配慮も重要ですが、優先順位は2番目以降。謙虚という概念はないと思います。公の場で日本人は相当な知識なしに「知っている」とは言い難いのですが、多少の知識でも「自分は知っている」と判断する人は世界に少なくありません。100点満点で60点の知識しかない場合、日本人は「あまり知らない」と答えがちですが、そんな日本人を（相手を油断させたとしてか）「ずるい」と呼んでくることもあります。

計画を立てる習慣の無さにも閉口しました。あるセミナーを実施した時のこと、応募が芳しくありません。現地人スタッフに応募促進を指示すれど、「問題なし」と落ち着いたもの。応募は伸びずヤキモキしていました。が、締切り直前に申込が殺到。計画変更が頻繁に起きる当該国の状況を踏まえ、応募者はセミナー実施の有無を見極めようとしていたのです。計画とは安定した社会で機能するということを理解しました。

戸惑いとフラストで否定的な見方になりがちな時期もありましたが、異文化に浸かっていると、現地の方と多くの価値観を共有していることを実感、差異の部分も中立的に受け止めるようになったと思っています。心の安寧がキープし易くなると、世界が広がるのでしようか、人生のパートナーに遭遇、初めて真剣に語学学習しました。

帰国後の生活は、妻（コスタリカ人）の異文化適応プロセスに随伴することになりました。日本の生活様式は私には日常ですが、彼女には非日常。3分の到着遅延で謝罪する新幹線のアナウンスや駅構内でせわしく立食する人々等に圧迫・威圧を感じたようです。また、開発途上国に多くの援助を行う金持ち日本に和式トイレ（スクワット動作が困難な外国人が多い）、更には汲み取り式が存在したことはショックのようでした。被害は私にも及び、残業で深夜帰宅すると浮気の嫌疑。

住宅の同僚からも説明してもらいましたが、「土日だけの夫は要らない。」と文句たらたら。私生活優先の彼女の国では深夜残業はあり得ません。他方、旬の食材の持ち味を生かした繊細でヘルシーな和食、茶道等の洗練された所作、おもてなしの心遣い等に感銘、今は三味線と琴に嵌まっています。年配の方々のご指導を受けているのですが、関心を示す外国から来た人にも自らが大切にしてきたものを継承してほしいとの思いで、ボランティアで教授して頂いています。

改めて、異文化適応・共存の要諦は相手が大切にするものを尊重し大事にすることのかなと思う次第です。（了）



第24回総会 (2018年6月2日) サルヴァトーレ フォモ 《永田町》





瑞浪高校首都圏同窓会員
杉山次郎 (昭和53年卒)

2011年3月11日、金曜日の朝、その日は休日でしたのでいつものようにテレビを見ながら朝食をとり、そろそろ出かけようかと思っていた矢先に、テレビは東北地方で起きた地震の映像を映し出していました。そして、地震に続き津波の映像も映し出されると、さすがにこれは大変なことになっていくと感じ、その後数時間テレビニュースに釘付けとなってしまいました。いま考えると、これほどまで長時間にわたりニュースを流し続けていたのは、やはり異常な事態だったのだと思います。

2010年3月末、私は26年間勤めた職場を辞め、翌年3月末から中東の国ヨルダンに国際協力機構（JICA）のシニア海外ボランティアとして派遣されました。ヨルダンでは障がい者施設で、その施設を利用して人たちの生活支援にかかわる仕事をしていました。任期は2年間で、東日本大震災が起きたときはほぼ折り返しという時期でした。

時が経つにつれ、インターネットやJICAの事務所、そして同時期にヨルダンで活動していた青年海外協力隊員などからの情報で日本の状況も次第にはっきりしてきました。そして、「外国でボランティアなどしている場合ではないのではないか」「今は、すぐにでも日本に帰って日本人たちのために何かをしなければならぬときなのではないか」など

と思いつつも、せいぜい義援金を送ることしかできない自分の状況がどうしようもなくもどかしく思えて仕方ありませんでした。

結局のところ何をしようかということもなく、任期を終えることになるわけですが、その時の思いが、帰国後の復興支援の仕事につながるようになったのだと思います。

2年のシニア海外ボランティアを終え帰国した後、一時期は退職する前に勤めていた職場でアルバイトをすることになったのですが、その間も被災地の復興のために何かすべきことがあるのではないかとこの思いは常にあり、控えめにアンテナを張っていたように思います。そうすると、2013年には復興庁とJICA等が連携して被災自治体に「復興支援員」を派遣する事業が始まり、それを知った私は即座に応募してしまいました。JICAのボランティアもそうでしたが、ひとりではふらふらとあちこちを渡り歩いているような状況を家人はよく承知してくれたものだと思います。実際の派遣までにはしばらく期間があり、2014年4月から福島県二本松市への派遣となりました。

二本松市にはJICAの訓練所があり、ヨルダンへ派遣される前の約2か月間入っていたので何となく不思議な「縁」のようなものを感じました。二本松市では昨年（2017年）3月までの3年間、福祉事務所に配属され、市役所の職員と一緒に市民の皆さんに対する相談支援業務に携わってきました。配属された当初は、お年寄りの電話口での話がよく聞き取れず、困ってしまう隣席の職員にどういう意味なのか尋ねたりして、迷惑をかけていました。また、相談を受けているつもりでいたのが、いつのまにやら、神奈川から来ていることをねざらわれたりして、そのまま違う話題になって終わってしまうこともありました。

二本松市は、福島県のやや内陸部に位置していますので津波による被害はありませんでしたが、市内には原発事故の被害者である浪江町や大熊町等の町民の方々の仮設避難住宅が数多く

ありました（現在は「復興住宅」などが整備され、仮設住宅は少なくなってきました）。ただ、そうした避難者の方々と二本松市民の間にはあまり交流がなく、避難生活の長期化にともない、いくつかの複雑な課題が生じてきており、ややギクシャクとした関係になってきているという実態も見られます。こうしたことが支援を進めていくうえでの難しさともなっています。避難者の方々への直接的な支援は十分にはできませんでしたが、それでも市役所の皆さんには暖かく迎え入れてもらい（自分ではそう思っています）、3年間の役割を無事終えることができました。

昨年4月に神奈川に戻り、また元の古巣で非常勤職員として仕事をしていますが、二本松市で築いた「つながり」を基盤にして、おせっかいにも月1・2度二本松市を訪ね、ボランティアとして地域住民の方々の生活を支援する活動に参加しています。

おっと、言い忘れてはいけないことを思い出しましたので、最後にお伝えします。ご存知の方も多いことと思いますが、福島県内には数多くの酒蔵があり、福島に来て数多くの日本酒を勧められ、今ではすっかり福島の地酒に魅了されています。福島県内では流通していないものも多くあります。福島に行く機会があればぜひご賞味を。

今回、瑞浪高等学校首都圏同窓会の幹事さんからは、東北での支援活動の模様を書くようにと依頼を受けました。うまくまとめることが出来そうにありませんでしたので、このような脈絡のないものとなりました。まいました。福島的美酒に免じてご容赦を（笑）。



ヨルダンにて

第24回総会 (2018年6月2日) サルヴァトーレ フォモ 《永田町》





第24回総会のご報告

- 会員参加者：48名（男性33名・女性：15名）
 - ご来賓参加者：8名
- 瑞浪市副市長 勝 康弘 様 瑞浪高校学校長 増田文代 先生
 瑞浪高校総務部長 奥田哲也 先生 瑞浪高校同窓会 会長 加藤健二 様
 瑞浪高校同窓会 副会長 田中 定 様 瑞浪市連合自治会長 伊藤修二 様
 恵那高校(城陵会)代表 伊藤和徳 様 多治見北高校東京支部 会長 羅本礼二 様

瑞浪高校首都圏同窓会会計報告

自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日 単位:円

収入の部		支出の部	
総 会 会 費	318,000	総 会 費 用	574,010
寄 付 ・ 祝 儀	140,000	通 信 費	27,348
預 金 利 子 其 他	7	事 務 費	0
		会 議 費	57,371
		慶 弔 ・ 交 際 費	10,000
		印 刷 ・ コ ピ ー 費	54,648
前 期 よ り の 繰 越 金	880,713	次 期 繰 越 金	615,343
合 計	1,338,720	合 計	1,338,720

第24回総会・懇親会のご報告

第24回瑞浪高校首都圏同窓会総会・懇親会は、本年6月2日(土)千代田区永田町のイタリアンレストラン「サルヴァトーレ・レオモ永田町」を貸し切りして開催致しました。昨年まで会場は「学士会館」でしたが、今回は気分を変え、会場をカジュアルに、会費はリーズナブルに、懇親会の余興を楽しむものにする事で多くの会員のご参加をいただくことに主眼を置きました。その結果、ここ数年参加者は40数人程度だったのが、今回は若い会員(平成卒業)も含めて56人と大幅に増え、会場が狭く感じられるほどでした。

母校から増田校長先生・奥田先生、また勝瑞浪副市長、加藤本部同窓会会長他のご来賓にお越しいただき、加えて瑞浪からOB女性4名も参加していただき賑やかな同窓会となりました。

懇親会は、母校から参加者全員にいただいた「瑞浪高校の紹介」ビデオをプロジェクターで映し、現在の母校の様子に興味深く、また懐かしく拝見しました。

懇親会イベント(余興)は、「チーム対抗クイズ」を行い、すべて瑞浪市・瑞浪高校にちなんだクイズにしました。

ではここでクイズの一つ。「瑞浪高校の沿革を見ると、1899年に土岐郡〇〇講習所が開設されたのが始まりですが、その名称は何でしょう? 〇〇に入る文字をお選びください。①実業 ②農業 ③商業

④工業 ⑤蚕業」さあ、お分かりになりましたか? 答えは⑤蚕業です。

このようなクイズですので、地元からの来賓の方は頼りにされ会員とともに必死で考えていただきました。楽しかったですね。

賞品は「きなあつ瑞浪」から取り寄せた、蜂蜜・地酒(小左衛門・若葉)・瑞浪ポーノポークカレー・干しシイタケ・和紅茶・味噌・竹皮羊羹等々地元の商品ばかりです。また「きなあつ瑞浪」からは「瑞浪ポーノポークお取り寄せ券」をご提供していただきました。皆、賞品ゲットに大盛り上がりでした。クイズの後は、全員参加でじゃんけん大会をし、最後に勝ち残った1人がクオカードを手に入れました。

最後に校歌斉唱・記念撮影を行い、盛会裏に終了となりました。来年は第25回となりますので、より楽しい同窓会を企画したいと思います。来年またお会いしましょう! ご参加お待ちしております。

幹事長 宮田栄子

「半分、青い。」の東濃弁が、ノスタルジアを誘う

NHK「半分、青い。」は東濃地方が舞台とあって、毎日楽しく見ていました。この番組で大変嬉しかったのは、主人公「鈴愛」の高校時代の担任役で、瑞浪高校卒業の尾関伸次さんが出演されたことです。

尾関さんはデビュー以来、「龍馬伝」や「ゲゲゲの女房」など数多くの映画やテレビドラマ、舞台などに出演され、実力派俳優として活躍中です。尾関さんはこの番組で方言指導もされていましたので、中村雅俊さんら出演者が、東濃弁をどんなイントネーションで話すのか興味津々でした。同じNHKドラマの西郷どんでは、一時薩摩弁が難しく理解できないという視聴者からの声がありましたが、尾関さんのご苦勞もあって、このドラマは回を重ねるたびに出演者の東濃弁が、板に付いてきたように感じられました。

私自身、東濃弁は就職するまでは当たり前のように使っていました。上司に直されて以来、40数年ほぼ封印された状態です。そんな中で、数年前に東濃弁が使えて、ふるさと気分が満喫出来る絶好の場所を見つけました。それが年一回都内で開催される、瑞浪高校首都圏同窓会です。

今年はイタリアンレストランで開催して、56名の参加者がありました。来年は、中華料理店を候補にして、更なる参加者を募りたいと考えています。真澄が丘で同じ空気を吸った懐かしい同級生や同窓生と談笑し、美味しい料理に舌鼓を打ちながら、瑞浪高校にまつわるクイズで「きなあつ瑞浪」のふるさと商品ゲットするなど、楽しい企画満載の同窓会です。

案内状が届きましたら出席に〇を付けて返信してください。お願いします。 副幹事長 長谷川周三